自然の鉛筆の技法と表現

ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット
植物の葉 「自然の鉛筆」より 1844年

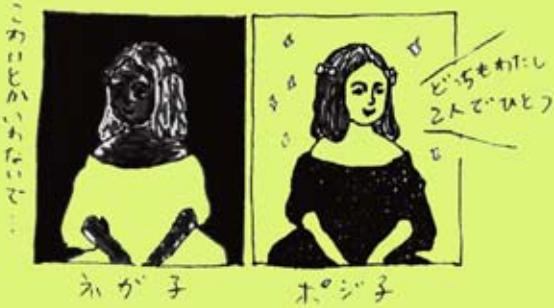
技法その① 写真の誕生

フォトジェニック・ドローイング (1839年)

「ドローイング」といわれるように対象物(ここでは葉っぱや羽、レースなど)を太陽光でそのかたちを描き出す最も原始的な写真技法。これまで、もののかたちや記憶は絵にしたり、文章にして残していたけれど、見たままのかたちを残す方法をずっと探っていた。いまから約170年前にその方法を発明したのが、タルボット。彼は発明家であり、アーティストだった。ちなみに、世界で最初の写真集『自然の鉛筆』の完全セットは世界に10冊しか存在しない超レアもの。写美コレクションのなかでもとびきり自慢の作品のひとつ。

技法その② ネガとポジのカンケイ

カロタイプ (1840年)



ひとつの像を写し出すために画像を反転したネガ像をつくることでこれまでの1点ものから複数を、大量につくりだせるようになったとても画期的な技術。19世紀から20世紀にかけて展開した。
ここから、ネガ・ポジ法を用いたアナログ写真の幕が開く。

技法その③　肖像写真で当時人気 No.1

ダゲレオタイプ (1839 年)

ルイ・ジャック・マンデ・ダゲールが公表した世界で最初の実用的な写真技術。いまでは写真といったら、紙ベースのものをイメージするけれど、このタイプは銀板を使っているのが大きな特徴。シャープでクリアな画像が現れるので当時、発表されたカロタイプよりも、断然人気だった。

(ただし、写真は 1 点ものなので複製できない。)

{どんな角度からみてみて。}

左画像：マシュー・ブレイディズ・スタジオ　題不詳 (母と二人の子供の肖像)　1840 年代頃

なぜ、ダゲレオタイプが人気だったんだろう。紙の写真 (カロタイプ) と銀板の写真 (ダゲレオタイプ)、自分の姿を写真で残したいのはどっち？

ロール・アルバン=ギヨー　題不詳　1938年

技法その④　やっぱり、絵画に憧れちゃう

ピグメント印画 (1897 年)

技術が年々発展して、「複製できる写真」が一般的になってきた頃、一部の写真家は絵画の存在に憧れを持ちつづけた。「写真も芸術として評価されたい！」と、この世に 1 点だけしかつくれない表現を生み出すための技法が注目された。

技法その⑤　モノクロ写真全盛期！

ゼラチン・シルバー・プリント (1873 年)

エドワード・ウェストン　ヌード　1936年

モノクロ写真といえば！ 1900 年代モノクロ印画紙の主流になったゼラチン・シルバー・プリント。鶏卵紙に比べると画像がクリアなうえに変色もしにくく、製造もカンタン！なことから徐々にゼラチン・シルバー・プリントに移行していった。

ルイ・デュコ・デュ・オロン　アジャンの風景、木と水の流れ　1872 年

技法その⑥　カラー写真の誕生

エリオクロミィ (1868 年)

写真の誕生から約 30 年、「見たまま」の色とかたちを残したいという長年の願いから、ようやくカラー写真が誕生。カラーの層がミルフィーユのように重なっているしくみ。

・発色現像方式印画 (1942 年)

一般的に使われて最も普及したのがこの技法。デジカメ以前に撮影した家庭用のカラー・フィルム写真は、ほとんどこの技法によるもの。コダック社の商標から「タイプ C プリント」とも呼ばれ、やわらかくナチュラルな風合いが得意。

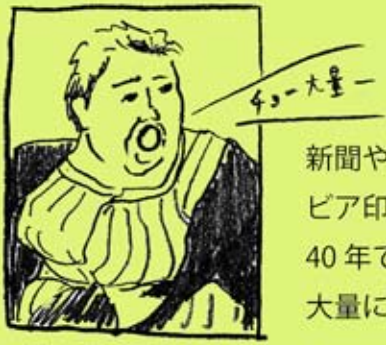
・銀色素漂白方式印画 (1963 年)

ネガからポジという方法ではなく、ポジからカラー・プリントを作り出す方法。保存性が高いのもグッドポイント。鮮やかな色彩が特徴的。

リチャード・ミズラック　デザート・ファイヤー #81
「デザート・カントス・プロジェクト」より　1984 年

それぞれのカラー写真を比べて、どんな違いがあるだろう？

フランコ・フォンタナ　赤と緑、モデナ　1977 年



技法その⑦　雑誌のなかの写真

フォトグラビア印刷 (1879 年)

新聞や雑誌、生の写真よりも目にする機会の多いグラビア印刷写真。「写真＝1 点もの」の時代からわずか 40 年で写真はかたちを変えて生活の中にとけこんだ！大量に刷られて消費されるのも、また写真の役目。